

「環境未来都市・下川」への疑問①

ルポライター・滝川康治(下川町在住)

新公営住宅へのまなざし

国の「環境未来都市」や「バイオマス産業都市」に認定され、関連事業が進む下川町。補助金を導入した箱もの建設が相次ぐが、住民の間には覺めた空気が漂う。事業の展開に無理はないのか、合意形成の手順は踏んでいるのか。下川に生まれ育った筆者の見方も交えつつ、検証する。

地域を支えた末に…

下川町の市街地から東へ10数キロ離れた一の橋地区。木質ポイラー施設の熱を供給する、真新しい公営住宅が並ぶ。隣に湯川熊造さん(85)の家がある。「入居を勧められたけど、あつちは狭いので俺は動かなかった。家賃は高いし、光熱費もなまらかるからね」。

81歳の妻は名寄の病院に入院中。札幌や苫小牧にいる娘が訪れるときのために、自宅で暮らす。

西興部生まれの湯川さんは、戦後間もなく国鉄職員として一の橋に定住。その後、営林署に移り、25年ほど造材などの請負仕事をした経験もある。「夜、従業員に酒を飲ませると家に入れる金がなくなら、子どもたちには苦労かけたね」。

れ、露店が並んだ。映画館まであった。そんな時代を生きてきた湯川さんは、公営住宅に違和感を覚える。「町から『木質ポイラーの熱を』百万円出して使わないうか」と言われたけど、断った。石油ストーブだけでも凍え死ぬことはない

木質ポイラー施設の敷地である下川にや新公住に投じた公費は10億円強。町はその後、環境未来都市計画の一環として、シイタケ生産施設をはじめ、商店と地域食堂を併設した交流プラザの建設、コミュニティセンター改築などを進めていく。「だけど、お金を

の故郷である下川に移住した。植物が好きで、フジザクラを愛してやまない。町などの協力を得て、コミュニティセンター裏の町有地にも1100本ほど植

原さんは力を込めたが、町の告知文が届いたのは数日前。「素晴らしい住宅を造ってやったんだぞ」という強気な感じがしましたね。町は2、3年後に旧公住を壊す予定だが、まだ住民に通知

は管理料をもらうほうが現実性があるのでは」といっているが、小山さんの見方だ。現在、地区人口は137人で、65歳以上は44%(町調べ)。障害者支援施設「山びこ学園」の利用者や職員を除く住民数は70人前後とみられる。新しい施設の建設が明るい未来を約束するのか、課題は

たが、町の告知文が届いたのは数日前。「素晴らしい住宅を造ってやったんだぞ」という強気な感じがしましたね。町は2、3年後に旧公住を壊す予定だが、まだ住民に通知は管理料をもらうほうが現実性があるのでは」といっているが、小山さんの見方だ。現在、地区人口は137人で、65歳以上は44%(町調べ)。障害者支援施設「山びこ学園」の利用者や職員を除く住民数は70人前後とみられる。新しい施設の建設が明るい未来を約束するのか、課題は

一の橋に残る違和感

身の丈に合う施設づくりへ課題も

よ。あつち(公住)の人はステテコ一枚で寝ている。どうかと思っね」。

かけすぎだよ。うまきいけはいいけど、悪いほうにいくと、通りすぎるだけの地域になるんじゃないかな」と、湯川さんが案じた。

根にしようと思見たんですよ」。

残留組は5戸ほど。今度の冬は不安という。吹雪のときは陸の孤島になる。入居者が少なくなったので、道路に近い場所に車を置いておかないと…」

入居開始後、訪れる視察者の姿が目立つ。「土建業の社長みたいな人がいっぱい来てるよ。仕事がないから、ほしいんだべさ」と、覚めた目で見つめる。

函館出身の小田原喜代吉さん(85)は、20年ほど前に妻

たが、町の告知文が届いたのは数日前。「素晴らしい住宅を造ってやったんだぞ」という強気な感じがしましたね。町は2、3年後に旧公住を壊す予定だが、まだ住民に通知

は管理料をもらうほうが現実性があるのでは」といっているが、小山さんの見方だ。現在、地区人口は137人で、65歳以上は44%(町調べ)。障害者支援施設「山びこ学園」の利用者や職員を除く住民数は70人前後とみられる。新しい施設の建設が明るい未来を約束するのか、課題は



公営住宅の隣で暮らす湯川さん。自宅には愛着がある